

Title	吸血鬼と恐れの変容：心理臨床における異界との関わり についての一考察
Author(s)	井上, 嘉孝
Citation	京都大学大学院教育学研究科紀要 (2007), 53: 72-84
Issue Date	2007-03-31
URL	http://hdl.handle.net/2433/43992
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

吸血鬼と恐れの変容

—心理臨床における異界との関わりについての一考察—

井 上 嘉 孝

† はじめに †

心理臨床において、恐れが訴えられることは珍しいことではない。恐れには様々なレベルがあるが、心理的な問題が生じることに対する恐れや、恐れそのものとしての問題が生じることによってクライアントの世界は一変させられる。それは、いわば日常的な世界に裂け目を生じさせる非日常的なものであって、現実的な対処がその改善や変化にあまり役に立たないこともある。そのような意味において、クライアントとは心理的な問題によって異界と接することを余儀なくされている人であるとも言えよう。癌患者との関わりにおいて岸本（1999）は、異界を生きる人と共にいるためには相当な覚悟と配慮が必要とされると指摘したが、このような異界への配慮とでも言うべき視点は、いかなる事例に対しても求められているのではないだろうか。

異界とは、主に民俗学で取り上げられてきた概念であり、あの世や彼岸としてこの世の外部にあると考えられてきた。異界がリアリティを持たない文化・社会・時代は、人間の歴史から見るとごく一部であろう。かつて、異界は我々のそばにあった。現代でこそ異界やそれと現実世界との境界は身近なものではないが、小松（2002）は次のように述べる。“異界はどこにもないが、どこにでもある。異界とは、それをリアリティとして感じ取っていた人にしか現れないのです。いたるところに異界はあり、別の観点からは異界はどこにもない。それは、私たちが発見していく、あるいは先祖がそう思ってきた歴史を発見していくしかないわけです”。

我々に異界のリアリティを感じさせてくれるのが、様々な物語に登場する魔物・怪物・お化け・妖怪などである。妖怪とは世界に生起する出来事のうち、正体不明であるがゆえに人々に不安や恐怖を生じさせる現象・事物を意味しており、古代人はこれを「もの」、その出現の兆候を「もののけ」と呼んだ（小松、1983）。異界のモノたちは我々に不安や恐怖を生じさせるが、不安や恐怖こそが我々にモノを語らせるのである。

“悪魔は人間の心のなかでたえず変化している…悪魔は、好んで近代的になりたがる”（セリグマン、1961）。心理学の立場としては、それら異界のモノの実体を解体するのではなく、そのイメージに結実しているありように留まりつつ、それと向かい合い、味わい、そこに内包されているものをより深く捉えると同時にそこからの影響を被っていく作業が求められるのではないか。そこで本稿では、人々に恐怖をかき立てる代表的な怪物である吸血鬼とその変化を取り上げる。死の観念をめぐる文化や宗教性といった背景を抜きにして吸血鬼を論じることはできない。しかしそのような議論に立ち入ることは最低限に留め、心理臨床の視点から吸血鬼と恐れについて検討し、それが心にとって何を意味するか考察していきたい。

† 伝承の中の吸血鬼 †

吸血鬼。現代の日本人がそう聞いて思い浮かべるのは、その名が吸血鬼の代名詞となっているドラキュラであり、黒いマントを翻して夜の闇を疾駆する耽美的な魔物の姿であろう。

1897年、小説『吸血鬼ドラキュラ』の初版がアイルランド人作家ブラム・ストーカーによって出版された。ストーカーの手によるドラキュラ伯爵は、ワラキア（ルーマニアの一部）の領主として実在したヴラド・ツェペシュVlad Tepes (1431 - 1476) をモデルとしている。このドラキュラや、1920年代以降数多く製作された恐怖映画などによって、吸血鬼には黒マント姿の貴族というイメージが定着しているものと思われる。

しかし、実のところそのような吸血鬼は19世紀以降の時代に限定されたフィクションとしてのイメージなのである。中世以来ヨーロッパでは基督教の繁栄の陰で様々な吸血鬼²が、民衆にとってノンフィクションの存在として跳梁跋扈していた。吸血鬼vampireという語が英語に入ったのは18世紀前半³であり、その頃のスラヴ地方には最も多くの吸血鬼が現れた。その一部は国家の公式記録にも登場している⁴。18世紀フランスの聖職者・神学者であったカルメによる記述などをもとに、以下二つの有名な吸血鬼事件を見てみよう（カルメ、1973の他、バーバー、1991；セリグマン、1961など参照）。

1732年、「パオレ事件」が軍医によって公式報告された。かれこれ五年ほど前のこと、トルコとセルビアの国境に住むアルノード・パオレという男が、干草車に押し潰されて死んだ。それからわずかな間に数人が急死した。その地方の言い伝えによれば、それは吸血鬼にとり憑かれた人間の死に方であった。そこで人々は、パオレが戦線にいた頃トルコの吸血鬼に苦しめられていたと言っていたことを思い出した。彼が悩んでいたのは、血を吸われた者が今度は吸う側に回ると信じていたからである。しかし吸血鬼の墓の土を食い、その血を少し舐めて救われる道を見つけた⁵と言っていたにもかかわらず、埋葬後四十日目に掘り出された彼の屍体には吸血鬼の徴が認められた。身体は鮮やかな血色で、髪も爪も髭も伸びており、血は固まっていなかった。習俗通り杭で心臓を突き刺すと彼は恐ろしい叫び声を上げた。その後、彼とその被害者17人の死体は焼かれて処分された。

次に1725年の「プロゴヨヴィツ事件」では、ハンガリーに近いセルビア領キシロファ村に住んでいたペーター・プロゴヨヴィツが、10週間前に死亡し埋葬された。しかし彼は睡眠中の村人のもとに現れ、彼に襲われた人々は24時間後に次々と死亡した。被害者が臨終の床で「夢の中で彼が忍び込んできて、喉に噛み付いて吸うのだ」と語ったため、彼は吸血鬼になったものとしてその墓が暴かれた。するとその皮膚は新鮮で、頬には赤みが差し、毛髪と爪は伸びていた。そして口には被害者から吸ったと思われる鮮血がついていた。彼の体に杭が打ち込まれると、全身から夥しい血を噴出した。ただちに彼は、焼いて灰にされてしまった。

歴史上高名な吸血鬼と称される者は他にも数多くいる。例えばドラキュラのモデルとして先ほど述べたヴラド・ツェペシュや、ジャンヌ・ダルクを扶けたジル・ド・レエ卿 (1404 - 1440)、ハプスブルグ家と縁の深い家柄の出身でハンガリーの伯爵夫人であったエリザベート・バートリー (1560 - 1614) などの貴族たちのほか、ロンドンの吸血鬼ことジョン・ヘイ、デュッセルドルフの吸血鬼ことペーター・キュルテンら20世紀の大量殺人犯たちが挙げられよう。ただし、彼らは自らの倒錯した欲望によって血なまぐさい事件を起こした実在の人物であり、非人間的存在とし

ての吸血鬼ではなく、全く非人間的ではあるが生きた人間であった。つまり彼らはあくまで比喩的な表現として吸血鬼と称されているのである。

しかし吸血鬼発祥の地でもあるスラヴの民間伝承の中に出現する吸血鬼は、土葬にまつわる習慣とともに描かれており、蘇った死者であった。また、それは貴族や殺人犯ではなく、土俗的な香りのする民衆として近親者や隣人のもとに現れる存在であった。すなわち、もとの伝承に従って吸血鬼というものを定義するならば「死後復活して、縁ある者を襲う生ける死者」とするのが妥当であると考えられる⁶。

↑ 伝承の吸血鬼の特徴 ―実体性とその排除― ↑

伝承の中の吸血鬼は、民衆にとって身近かつ現実的であったがゆえに非常に恐ろしい存在であった。もちろんヴァリエーションは数多くあるが、伝承にしたがって、その典型的特徴をまとめてみよう。

- ① 特徴的な死者：吸血鬼になるのは、主に特徴的な死者である。
- ② 腐敗しない死体：死後に靈魂としてではなく、肉体を持った物理的存在として蘇る。
- ③ 縁者を襲う：家族・隣人などの縁者を襲い、様々な害をなして死に至らしめる。
- ④ 感染：吸血鬼の被害者はその死後に吸血鬼となる。
- ⑤ 変化：人間が非人間的存在の吸血鬼に変化する。吸血鬼は動物や霧などに変化できる。
- ⑥ 退治：にんにく・杭・火葬など、特定の方法によって退治される。

①「特徴的な死者」とは、猫などの動物にその死体の上を飛び越された者、吸血鬼に殺された者、魔術や妖術などに携わった者や異能者、犯罪者、自殺や他殺者、産死者・異常出生者（奇形や赤い羊膜を被っているなど）・私生児などである（種村，1983；平賀，2000）。洗礼を受けられなかった者や破門・戒律違反者はキリスト教の正式な葬儀を受けられず、神罰があると考えられ、吸血鬼出没の不安と恐怖をかき立てる背景となった⁷。また宗教的に真っ当な人間であっても、その葬儀が正しく行えない場合には同様であった。

葬送とは死者の成仏のために行われ、この世への未練や肉体への執着を断ち切るものであるが、上記の特徴を別の側面から見ると、複雑な思いや未練を残すことが多い死であると考えられる。日本における幽霊の典型的なセリフは「うらめしや」であるが、西洋においても"肉体的な情欲が断ち切れないために生きているものもとへ帰ることをしいられた死者たち"（セリグマン，1961）がこの世に戻ってくる。吸血鬼が肉体を持った物理的存在として蘇るという点や、縁者を襲うことにもこのような未練がよくあらわれているように思われる。

しかし死はいかなるものであっても、残された者に不安・悲嘆・哀惜・後悔・怒り・罪悪感など様々な思いを生じさせる。そのような必然的な思いこそが死者と別れ、送るために行う葬送の儀式を発展させたと考えられる。だが何らかの理由によってその儀式がしっかりと行われな場合には、送る側の思いも収まり難いのではないだろうか。

小此木（1979）は、対象喪失の後で思慕の情が続くと失った対象を再生させ永久に保持したい願望にまで高まるという。一方、無意識にその者の死を願う気持ちなど、思慕の裏にありうるネガティブな思いは死者に対する強い恐れにつながっていくと考えられる。吸血鬼には人々の強く

複雑な思いが集約されていると思われるが、伝承の中では恐怖以外の人々の感情はあまり記述されていない。しかし吸血鬼伝承があらわすこのような思いについて、種村（1983）は「いみじくも"死体追慕と死者恐怖との両極に分裂した、古くからの死に対する人間のアンビヴァレンツの表現"と述べている。

②「腐敗しない死体」物理的・具体的存在として蘇るのが吸血鬼である。破門されたり洗礼を受けられなかったりした者は、神罰によって身体が腐敗しないと考えられた。吸血鬼は、大地に迎え入れられない恐るべき存在と捉えられた（あるいは悪しき反自然的存在であるがゆえに、大地という自然に迎え入れられない）。だがその一方でキリスト教では、聖人の死体は永遠の美の封印の象徴として腐敗しないと考えられているのである。つまり腐敗しない死体にはまるで逆の二通りの解釈が与えられたのである⁸。いずれにせよ、自然なあり方（腐敗）を否定することは超越的な属性を付与される徴となる。ただし吸血鬼伝承に見られるように、俗人が自然に反して腐敗しないことは主として悪の徴とされたのである。

③「縁者を襲う」吸血鬼が被害者に死をもたらすことはその恐怖の大きな要因であるが、しかしそれだけではない。先ほど述べたように死者への恐怖感の背景には、死者に対する後悔や罪悪感あるいは無意識の死の願望が考えられた。その思いが強く複雑であるほど、恐怖感も強いと考えられる。

マリノウスキー（1999）は死体からは有害な力が出ており、よそのものには無害であるが、親族には危険があるため死体から離れていなくてはならないという未開人のタブーを紹介している。すなわち死者が自分と近い存在であるほど、その死を巡って感じられる思いは強く複雑であると考えられ、それは必然的に強い恐怖に通じると言える。フロイト（1969）は「無気味なものとは、一度抑圧を経て、ふたたび戻ってきた「馴れ親しんだもの」"であると述べ、白雪姫などの童話や聖書における蘇りは無気味な印象を与えないことから、不安を呼び起こすのは物的あるいは心的現実性であるとしている。吸血鬼が縁のあった者を対象に害をなすと考えられてきたのも、そのような根源的な心理を背景としているのではないだろうか。

さて、吸血鬼に襲われたとき、第一の被害は文字通りの吸血であることが多い。血は様々なタブーと神聖なものを喚起させる。「動物の靈魂あるいは精霊は血の中にある」（フレイザー、1951）。聖書には「わたしが血をあなたたちに与えたのは、祭壇の上であなたたちの命の贖いの儀式をするためである。…いかなる生き物の血も、決して食べてはならない。すべての生き物の命は、その血だからである。それを食べるものは断たれる。」（レビ記17.10-15）とある。

また種村（1983）によれば、血は靈魂の永生の象徴であり、それゆえ吸血鬼が吸い取っていくものは血に限らない。Aarne（1961/1973）によるフォークロアの分類において 363「死体や花嫁を食う」The Vampireが挙げられている。性的関係を後家の妻に迫ったという話（例えば種村、1983、pp.21-22）も多く見られる。それゆえ吸血鬼は、物理的に蘇り、自らが生きるためのエネルギーを血や肉体という物質に求める「物質的なものを指向する存在」と言えよう。

④「感染」は、吸血鬼の非常に大きな特徴である。パオレ事件・プロゴヴォヴィツ事件はともに、感染という要素が吸血鬼に対する非常に強い恐れを生み出していた。それは吸血鬼の被害者になることによって自らも吸血鬼になってしまうかもしれないという恐怖である。

悲哀の苦痛や思慕の情が強いあまりに、失った対象と同一化することでそれを克服しようとす

る心の動きがある（小此木，1979）。吸血鬼はその被害者と近い存在であり，ある意味で吸血鬼と被害者とは感染以前から共通性をもっている。すなわち血縁，地縁などという共通性の基盤の上に恐れが生じてくるのである。それは裏を返せば自らの吸血鬼性，つまり「私は吸血鬼が意味するものを持っている」ということを意識させられる恐怖に他ならないのではないだろうか。

⑤「変化」前項でも述べたように，人々は自分が吸血鬼になることに非常な恐れを抱いた。吸血鬼になるということは，死すべきものmortalとしての人間が，不死／不変のimmortal存在へと変化するということである。“彼は生きながらえるために，生きものの血を飲まなければならない。…彼の肉体は腐敗すべきであるのに，みずからの意志でそうすることはできない”（マクナリー・フロレスク，1978）とは，人間には想像しがたい不死の／神のimmortal苦しみであろう。

また不死で不変の吸血鬼は，犬・猫・蝙蝠など様々な動物や霧などに変化する能力を持つ。祝福されたものとしての死と安らぎのみが，吸血鬼に絶対に訪れない変化なのである。すなわち吸血鬼になることとは，不変であるが様々に変化するという逆説的存在になることであり，その代償として永遠に救済されない存在になることでもある。

⑥「退治」ここまで述べてきたように吸血鬼には（民衆にとって心理的・物理的に）現実の恐れがあり，人々はそれを排除する必要に駆られた。穏やかな対処法としては，墓や家の周りに小麦の種などを撒いておく。すると吸血鬼はなぜかそれを一粒一粒数えずにはいられないので，数えているうちに夜が明けて帰ってってしまう。このような話には御伽噺のような恐怖と滑稽味がある。また，吸血鬼に対する有名な武器であるにんにくや十字架も，吸血鬼を退治するというよりは追い払うためのアイテムであった⁹。

しかし，現実的な恐怖として吸血鬼の実在が信じられていた時代には，吸血鬼はさらに徹底的に退治されるべきものであった。その退治方法には，吸血鬼とみなされた死体の頭を切り落とす，胸に杭を打ち込むなど様々な方法があったのだが，最も徹底的な方法は燃やすことであった。燃やすと灰になり，その実体は消える。つまり燃やすこととは，吸血鬼の最大の特徴である物理的に蘇ってくるという実体性を破壊する行為に他ならない。しかしそれは時代・文化・宗教的にみて，死体の凌辱に他ならない反自然的で人工的artificialな行為でもあった¹⁰。

† 吸血鬼の変化 一実体性の喪失と内面化一 †

伝承におけるノンフィクションの吸血鬼は，腐敗しない死体として蘇り，吸血に象徴される害によって縁者に恐怖をもたらす実体的存在であった。その恐怖は，キリスト教によって救済されない悪・反自然・不変性という性質を感染させることによる。しかしそれらの性質は，原罪・楽園追放・不死への願いなどとしてもイメージされるように，実はある意味で人間にとって普遍的なものであるとも考えられる。ここで吸血鬼の根源に遡って，その意味をさらに掘り下げ，現代に至るその変化や歴史性を捉えてみよう。

種村（1983）は，吸血鬼の原型として女神ヘカテー¹¹に仕えた巫女の秘儀を挙げている。真っ黒なマントに身を包み，額と掌に悪魔の血の印をした巫女たちが墓地に忍び入り，目をつけておいた死んだばかりの美少年の墓を暴く。亡骸に秘薬を塗り，硬直した蛇で鞭打つことで死者の靈魂は呼び戻される。やがて巫女たちはナイフで死者の胸を裂き，心臓をつかみ出して血を飲み干

す。靈魂が蘇ったがゆえに、これは生き血とみなされた。このような秘儀は血の供犠、すなわち血の魔術的生命力を手に入れ、それを神に捧げることが重要であった。

古代ギリシアの哲学者アポロニオスは、コリントで吸血鬼ラミア¹²に出会った。彼の門人に、メニッポスという若者がいた。メニッポスは、美しく大金持ちの異国の女性に愛されていた。身分は違っていたが、二人は結婚を望んだ。結婚披露宴の主賓として招待されたアポロニオスは門人の危険を感じ、婦人の家に着くと花嫁を紹介してもらいたいと言った。彼は鋭い目つきで彼女を眺めてからメニッポスのほうを振り向き、「金と銀の容器や装飾品は誰のものか？」と尋ねた。「彼女のものです。私のものはこれ（自分の外套）だけですから」とメニッポスは答えた。アポロニオスは「この装飾品は、全部本物じゃない。見せかけだ。そして君の美しい上品な花嫁は、人間じゃなく吸血鬼ラミアだ」と言った。アポロニオスが銀のコップを手にとると、それはまもなく消えてしまった。同じように、その他の食器も見えなくなった。料理人や召使は、アポロニオスが呪文を唱えようと、埃になってしまった。家は倒壊して廃墟になった。婦人はこれ以上苦しめないようにと哀願しながら、真相を白状した。彼女はメニッポスを食べる前に、彼を太らせるつもりだった（セリグマン、1961；サマーズ・日夏、2003）。

古来東西、人を喰う女神はカーリー、鬼子母神など他にも数多い。しかし人喰いは女神だけではない。ユングは以下のような夢を自伝に示している。

穴を通じて地下の部屋にこわごわ下りていくと、血の赤色のじゅうたんが台の下まで及び、台の上には黄金の玉座があった。そこにはてっぺんに一つの目がある巨大な肉の棒が屹立しており、「よく見てごらん、あれが人喰いですよ」と母が叫ぶ声が聞こえた。それが恐れを一段と強め、目が覚めると汗びっしょりで死ななばかりだった（Jaffe, 1972より筆者が要約）。

ここでは人喰いはファルスのようなものとして現れている。ラミアも女神か男神かその両方かわからない（ケレーニイ、1974）というように、人を喰う（犠牲として求める）ものとは本来、男女という性に分節化される以前の、人間には手も足も出ない圧倒的で、崇高さと怖さを喚起させる「聖なるもの」（オットー、2005）と考えられるのではないだろうか¹³。吸血鬼イメージの根源には、そのような聖なるもののイメージがあると考えられる。だが人間を超え、喰らい、包み込む神話的存在は中世において変化する。このような変化に深く関係しているのは世界観の変化であると思われる。

16世紀半ば、コペルニクスが地動説を発表した。"新しい宇宙像では上下の別がないから、神は上にありえないことになる。また宇宙の外側には何もなく、新しい神の住まいを探さねばならなかった。そこで、神の住まいはいたるところにあるという信念が、ひろくいきわたったのである"（セリグマン、1961）。宇宙像の変化は必然的に異界観も根底から変化させ、それに伴って異界のモノたちも形而上的存在としての神や悪魔から、より人間に近い形而下的存在へと変化していった。このような世界観の変化とともに、キリスト教の拡大に伴って土着の信仰が取り込まれ、そこで混交と軋轢を生み出したことにも関係して、「18世紀スラヴ地方」にこそ異界のモノでありながらも物質性を指向する吸血鬼が最も多く見られたのだと考えられる。

同じ18世紀には、啓蒙思想がヨーロッパに押し寄せた。吸血鬼の闇は、啓蒙思想の光によって表に表れると同時に実体性を失っていった。吸血鬼は外側から観察・記述され、様々に論じられた。その一方で死というものも民衆にとって徐々に身近なものでなくなり、宗教や商業によって

困り込まれた。フランスでは1776年に教会内に墓を作ることを禁じる勅令が出され、イギリスには葬儀屋が開業し、ヨーロッパ各地で大規模な霊園が誕生した（ヴォヴェル、1996）。

そのような中で、ヨーロッパにおいて伝承の吸血鬼を文学化した先駆けは、ゲーテ（『コリントの花嫁』1797年）である。19世紀に至ると、ロマン主義の流れから貴族的な吸血鬼が描かれ（ポリドリ著『吸血鬼』1819年）、それを嚆矢としてゴシック文学上に吸血鬼が数え切れないほど現れた。そして19世紀末には吸血鬼文学として世界的にもっとも有名な『吸血鬼ドラキュラ』が誕生したのである。これらフィクションとしての吸血鬼は主人公たちに死をもたらす恐怖の対象であり、19世紀には戯曲として劇場に登場し、そして20世紀には恐怖映画としてスクリーンに投影された。

フィクションとしての吸血鬼には、従来見られなかった特徴がある。伝承の中の吸血鬼は恐ろしい力のある影を持っており、死者を鏡に映すことも忌むべきこととされた（バンソン、1994）が、フィクションの吸血鬼は影を持たず、鏡にも映らない。また燃やさずとも、太陽の光を浴びただけで灰になってしまう。影を持たない、鏡に映らない、太陽の光によって灰になってしまうなど、これらの特徴は吸血鬼がその実体性を喪失したことを如実に示している。

19世紀から20世紀はまた、科学的発見により血液・遺伝・心理に関する見方が大きく変化した時代でもあった。先ほども述べたように、古代から血液は生命や力を伝達する魔術的な物質であり、古代ギリシアの剣闘士は力を得るために倒した相手の血を飲んだ。17世紀の医師は様々な病気の治療のために動物の血液を人に輸血し、多くの死者を出した。しかし1900年ABO式血液型の発見により、血液は分離・研究が可能な人体の構成要素へと変容した（スター、1999）。

遺伝学は19世紀のメンデルの法則から飛躍的に発展を遂げた。「血のつながり」と素朴に語られてきたことがより微視的に捉えられ、生命を複製し創り出す物質としてDNAが見出された。遺伝子は身体的设计図であると言われるが、それは私個人に留まるものではなく、私に伝わり／私が伝えるものをも意味するのである。この遺伝情報が変化することで、遺伝的な病や障害が生じる可能性が生じる。しかし遺伝子の変異は特別なことではなく、健康な人の遺伝子にも理論上数箇所は必ず存在する。いわば我々は全員が血によってそれを媒介する、感染したキャリアーなのである。遺伝子の発見によって、生命の歴史に乗って、一個体を超えて、全ての生命に伝わってきた集合的なものがDNAという物質として個体的な身体の内に取り込まれた。

さらに心理学の領域では、『吸血鬼ドラキュラ』と奇しくも同時期にフロイトによる無意識の発見があった。伝承の吸血鬼が生まれた土地を決して離れなかったのに対して、ドラキュラはトランシルバニアの土を入れた棺の中に入ってロンドンへとやってくる。『吸血鬼ドラキュラ』の舞台は大都会のロンドンと、「森の彼方の地」の意味を持つトランシルバニアという二つの地を、意識と無意識の関係のように行き交う。吸血鬼を光によって退治することは、無意識の意識化という精神分析のパラダイムのメタファーのようでもある。“デーモンとは…抑圧された欲動活動の派生物にはかならない。…中世がこれらの心的存在物を外界に投影し、その発生の原因を外に求めたのに対し、われわれは投影を否定して、これらの心的存在物が棲息している患者の内面生活そのものの内にその発生の原因を見る”（フロイト、1984）。

困り込まれた異界、あるいは異界の内面化。赤坂が以下のように述べることは、世界観の変化と無意識の発見との関連性を簡潔かつ明確に示している。“かつて世界が内部／外部にくっきり

二分されていた時代には…人々はみずからの〈影〉を、内部の欠かしえぬ補完項である〈異界〉および〈異人〉としてしか体験できなかった。…〈異界〉という観念が薄れていったとき…内面化された〈異界〉は無意識と名づけられた" (赤坂, 1985)。

これに呼応するように、20世紀を通して吸血鬼は恐怖を投影する対象から内面を描かれる存在へと変化していった。吸血鬼である自分に何の疑問も持たないレストラトに対して、自分の存在や行動に苦悩し続けるルイが対照的に描かれているハリウッド映画にもなった「インタビュー・ウィズ・ヴァンパイア」(ライス, 1987)がこの典型であろう。また萩尾望都の漫画「ポーの一族」では、成長・変化せずに永遠の命をもつことの悲哀が全編にわたって通奏低音のように流れている。手塚治虫は「ドン・ドラキュラ」の中で、現代の日本に来てしまったドラキュラの子孫とその娘の生活や困りごとをコミカルに描いている。これらの吸血鬼は恐怖の対象ではなく、物語の語り手なのである。それゆえ、彼らは消え去ることがない。

外的な異界は喪失し、囲い込まれ、内面化された。ノンフィクションの吸血鬼は、その実体が失われ、内面を描かれるフィクションの吸血鬼へ変化した。このことは、吸血鬼が単なる外部の存在から、我々の内に同様の要素を見出すことのできる存在へと変化したことを示していると考えられる。神話的で外的な異界が人間の中に囲い込まれ内面化する過程、そして吸血鬼が実体性を喪失しその内面を描かれるものへと変化する過程は、19世紀末から20世紀にかけての人間存在の根本に関する重大な発見とパラレルなのではないだろうか。今や吸血鬼は悲喜劇として、現代を生きる人間とその心理をシニカルに表現しているイメージのようである。

↑ 恐れとその変容 —吸血鬼の夢— ↑

外的な異界を喪失した現代では、内面化された異界との関係が問題となる。吸血鬼が我々の比喩やイメージとして現れるとき、人間の根源に触れるような恐れを感じさせられる。この恐れはわれわれと内面化された異界との関係をよくあらわしているように思われる。そのような意味において吸血鬼は、異界との関係を以前とは違う形で実現するために重要な意味を持っているのではないだろうか。

ここで、あるクライアントの見た吸血鬼の夢を提示し、吸血鬼とその恐れについての考察をさらに進めたい。心理臨床で夢が扱われることは、外側からの観察記述を分析することとは異なり、「無限の内面性」(ギーゲリッヒ, 2001)に関与し、その深みから意味を汲み取り、その体験を内側からともにすることであると考えられる。

夢見手であるクライアント(プライバシーに配慮して、情報の提示は最小限に留める)は、家族関係の問題を長年にわたって現実的な方法で対処してきた。しかし、まさに血の滲むような戦いを繰り返し続けることに疲弊し、根本的な解決を求めて心理臨床の場を訪れた。ここで提示する夢は筆者と5ヶ月ほどお会いした頃に語られたものである。

夢：父と車に乗って出かける。ハイウェイを走って、温泉を見つけて入る。すると父がヴァンパイアに変わる。自分は父を温泉に沈める。でも自分は父がそんなことで死なないことをわかっている。殺しきれない。自分はバスタオルを巻いたままで逃げる。山道を逃げて、途中で靴だけ取りに帰る。それを抱えて逃げる。

屋敷があって、そこに助けを求めて入ると、実はそこはヴァンパイアの屋敷だった。人がたくさんいるけれど、その人たちがヴァンパイアであることがわかる。大きなテーブルの一角に10人くらいの人間がいて、その人たちに声をかけても、その人たちは他の人が実はヴァンパイアであることがわからない。自分はテーブルの下に隠れて、おもちゃの銃を渡される。こんなもので何ができるのかとあきれるように思う。夜になって、みんながヴァンパイアに変わって、自分が戦う。二人ぐらいは倒した感じがあるが、そのあとはいつの間にかみんな倒している。

そこでヴァンパイアを動かしているやつが3, 4階上のフロアにいることがわかって、みんなでエレベーターで昇ろうとするが、小さいので、五人ずつ二回に分けていくことになる。私は先のグループにいて、エレベーターを降りると、つぎのフロアに行くまでに通過しなくてはいけないポイント、お化け屋敷みたいなのところがあって、そのことを次にやってくるグループに教えるために自分は一人でそこに残る。そうすると周りにたくさんのヴァンパイアになりかけのやつがいて、おもちゃの剣が出てきて、戦う。倒している途中で目覚ましがなる。

車に乗ってハイウェイを走り、温泉に入る。日常を離れた治療あるいは変容の場としての温泉は心理臨床の場とも重なる。そのような場で、夢見手は父に異界のモノを見る。そのヴァンパイア性（近親者に害をなし、感染すること）に恐怖を感じるが、殺しきれない。夢見手には実体的な退治に意味のないことがわかっている。

夢見手はバスタオルのまま靴だけを取って、身一つで逃げる。山道を上へと登り、助けを求めてたどり着いたのはヴァンパイアの屋敷である。恐れ／逃げることによって、夢見手は逆にその本質あるいは中心へと近づいていく。他の人は自分がヴァンパイアであることがわからない。恐れのない者は、ヴァンパイアに気づき向き合うことができない。つまり、恐れこそがヴァンパイアとの出会いを生み出しているとも言える。

戦う武器はおもちゃの銃や剣であり、いつのまにか吸血鬼は倒されている。そしてお化け屋敷を抜けることによって、夢見手と人々は「ヴァンパイアを動かしているもの」のもとへ向かう。おもちゃの武器やお化け屋敷に表わされているのは、その戦いや恐怖の非実体性ではないだろうか。そこでは、戦いあるいは恐れ続けるという夢見手の人為的な行為のみが純粋に求められているかのようである。

逃げ続けることによって、夢見手はより根本へと近づいていく。それは吸血鬼イメージの根源にある聖なるものようである。しかし最後まで戦いを続けているところで目が覚める。逃げども、戦えども終わらない。一瞬一瞬だけを見ると意味のない繰り返しのように思え、我々の自我にとって苦しみや問題に他ならないことが、しかし実は心の深いレベルからすると根源的・本質的なものと関わっていくためのかけがえのない大切な営みを続けていることであるのかもしれない。夢見手は最後に「一人でそこに残り」、個人的な苦しみに留まり続ける。ここでは「恐怖と苦しみから抜け出すこと」よりも、「その根源の場所とそこに向かう道をわかっている者として／あること」が選ばれている。それを通じて人々がヴァンパイアを動かすものへと向かう。夢見手は「父が死なないこと」「人々がヴァンパイアであること」「ヴァンパイアを動かしているものが上のフロアにいること」など、多くのことを「わかって」おり、それを多くの人に教えようとして残る。わかる、気づくということは実体性を持たない。それは物理的な火ではなく、心

理的な次元に光をもたらすことと言ってもよいのではないだろうか。夢の中で夢見手は、上の階へ上るという具体的な変化ではなく、わかっていることに気付くという心理的な次元での変化をする。このように考えていくと、単に恐れを減らしたり消したりすることが重要なのではない。恐れに対して心理学的に取り組むためには、そこに秘められている可能性、あるいは心が実現しようとするものを捉えていくことが求められるように思われる。

さらにヴァンパイアとの出会いがヴァンパイアを動かしているものへと向かっていくことにながっていったように、我々は恐れを（聖なるものに対する）畏れ、すなわち聖なるものと出会う契機としても捉えることができるように思われる。そこで求められるのは、恐れを消し去ることというより、畏れへと昇華させることであろう。キリスト教においては、神と悪魔は常に対立するものであるが、日本の神観念は可変性に富み、人々は妖怪を神に変換するために祭祀を行った（小松，1983）。すなわち恐れが畏れへと変容するためには祀るという作業が必要とされると考えられる。

この祀るという作業に必要な要素は何であろうか。それは本質的なものへ至るために逃げ・戦い続けるこの夢の文脈から考えると、継続性（あるいは反復性）と人為的な行為（あるいは反自然）という二つの要素であるように思われる。例えば念仏や題目にもこの二つの要素は色濃く見て取れる。祀られなくなると神は零落し妖怪化する（小松，1983）というように、祀るためには常に祀り続けなくてはならない。そして祀る為には、ただ自然なnaturalだけでは不十分であり、燃やす、埋める、踊る、歌う、祈る、供える、弔うなどといった様々な人為的なartificial行為が必要とされる。そのような意味において吸血鬼とは、恐れと出会い、恐れを変容させるための心理的な作業（燃やすことによって抑圧する、光をもたらす、あるいは畏れへと昇華させる）を助けるイメージとして捉えられるのではないだろうか。

† おわりに †

夢見手のように、心理臨床の場を訪れるクライアントたちは異界と接し、関わることを余儀なくされる。その流れに織り込まれるセラピストも同様であろう。そのようなことを考えるきっかけとして、本稿では吸血鬼を取り上げ、その恐れについて論じた。ただ、日本にはいわゆる吸血鬼が存在しない。日本で人間が妖怪に変身することは、しばしば内面の姿が外面に表われたものとして説かれる（小松，1983）が、我々もこのような意味ではしばしば異界のモノと出会い、あるいは異界のモノになっているのではなかろうか。

我々は恐れと出会ったとき、それを軽減することや排除することばかりを考えがちである。しかし、それは心理学的に恐れと関わる姿勢とは相反するように思われる。恐れが求めるのは、それが心にとって意味することを問うていくことであり、そしてそれゆえに恐れとは変容をもたらす可能性を持つのではないだろうか。そのような視点のもとに、恐れに対して畏敬と謙虚さをもって向き合うことが大切であると思われる。

† 参考・引用文献 †

- Aarne, A. (1961) : Verzeichnis der Marchentypen. translated and enlarged by Stith Thompson (1973) : The types of the folktale : a classification and bibliography, Helsinki

- : Suomalainen Tiedeakatemia.
- 赤坂憲雄 (1985) : 異人論序説, 砂子屋書房.
- バンソン, M. 松田和也訳 (1994) : 吸血鬼の事典, 青土社.
- バーバー, P. 野村美紀子訳 (1991) : ヴァンパイアと屍体, 工作舎.
- カルメ, D. A. 種村季弘訳 (1973) : 吸血鬼たち, 種村季弘編, ドラキュラ・ドラキュラ, 薔薇十字社, pp.257-280.
- フレイザー, J. G. 永橋卓介訳 (1951) : 金枝篇 (二), 岩波文庫.
- フロイト, S. 高橋義孝訳 (1969) : 無気味なもの, フロイト著作集 第3巻, 人文書院, pp.327-357.
- フロイト, S. 池田紘一訳 (1984) : 十七世紀のある悪魔神経症, フロイト著作集 第11巻, 人文書院, pp.102-133.
- ギーゲリッヒ, W. 河合俊雄編・監訳, 田中康裕訳 (2001) : 夢との取り組み, ユング心理学の展開 (ギーゲリッヒ論集)3 神話と意識, 日本評論社, pp.31-61.
- 萩尾望都 (1998) : ポーの一族 (1)~(3), 小学館文庫.
- 平賀英一郎 (2000) : 吸血鬼伝承「生ける死体」の民俗学, 中公新書.
- Jaffe, A. ed. 河合隼雄・藤縄昭・出井淑子訳 (1972) : ユング自伝1-思い出・夢・思想一, みすず書房.
- 河合俊雄 (2000) : 心理臨床の基礎2 心理臨床の理論, 岩波書店.
- ケレーニイ, K. 高橋英夫訳 (1974) : ギリシアの神話-神々の時代, 中央公論社.
- 岸本寛史 (1999) : 癌と心理療法, 誠信書房.
- 小松和彦 (1983) : 魔と妖怪, 宮田登著者代表 (1983) : 日本民俗文化大系 第四巻 神と仏, 小学館, pp.339-414.
- 小松和彦 (1995) : 異人論, ちくま学芸文庫.
- 小松和彦 (2002) : 異界をめぐる想像力, 国立歴史民俗博物館編, 池上良正・内田順子・京極夏彦・小松和彦・島村恭則・鈴木一馨・常光徹・山田慎也著 (2002) : 異界談義, 角川書店, pp.87-88.
- 栗原成郎 (1991) : 増補新版 スラヴ吸血鬼伝説考, 河出書房新社.
- マリニー, J. 池上俊一監修, 中村健一訳 (1994) : 「知の再発見」双書38 吸血鬼伝説, 創元社.
- マリノウスキー, B. 泉靖一・蒲生正男・島澄訳 (1999) : 未開人の性生活, 新泉社.
- 小此木啓吾 (1979) : 対象喪失, 中公新書.
- オッター, R. 華園聰磨訳 (2005) : 聖なるもの, 創元社.
- ライス, A. 田村隆一訳 (1987) : 夜明けのヴァンパイア, 早川書房.
- サマーズ, M. 日夏耿之介 (2003) : 吸血妖魅考, ちくま学芸文庫.
- セリグマン, K. 平田寛訳 (1961) : 世界教養全集20 魔法-その歴史と正体, 平凡社.
- 須永朝彦 (1993) : 血のアラベスク-吸血鬼読本, ベヨトル工房.
- スター, D. 山下篤子訳 (1999) : 血液の物語, 河出書房新社.
- スターカー, B. 平井呈一訳 (1971) : 吸血鬼ドラキュラ, 東京創元社.
- 種村季弘 (1983) : 吸血鬼幻想, 河出書房新社.
- 手塚治虫 (2000) : ドン・ドラキュラ, 講談社.
- ヴォルテール, F. (1973) : 吸血鬼, 種村季弘編, ドラキュラ・ドラキュラ, 薔薇十字社, pp.281-290.
- ヴォヴェル, M. 池上俊一監修, 富樫環子訳 (1996) : 「知の再発見」双書63 死の歴史, 創元社.

注

¹ 例えば種村 (1983) は, 恐怖と悦楽の吸血鬼表象はキリスト教圏にしか見られず, キリスト教に固有の倒錯であるとし, その関連を論じている。

² 吸血鬼を指し示す語は, 英・仏・独語圏で使われている vampire/vampir だけでなく upyr' (ロシア), upir (スロヴァキア), vukodlak (セルビア・クロアチア), vrykolakas (ギリシア), vulkolak (ブルガリア), strigoi (ルーマニア) など様々な呼称があり, 微妙な異同がある。またその語源には, 鳥に

似て非なるもの、人狼名称との混交、魔女という三つの流れがある（種村，1983；栗原，1991；須永，1993参照）。

3 『オックスフォード英語辞典』によれば1734年、『吸血鬼の事典』（バンソン，1994）によれば1732年とのこと。

4 吸血鬼伝承の記録については、有名な事件に関しては多くの研究書に同じ記述が引用されているのはあるが、とくに広範な民俗学的文献調査を行ったバーバー（1991）に詳しい。

5 この方法は、自らが吸血鬼になるのを予防する方法として信じられていた（栗原，1991）。

6 吸血鬼について、医学的な観点からの腐敗異常（例えばバーバー，1991）や、歴史的観点から流行病とりわけ黒死病（ペスト）との関連が論じられている。また現代ではエイズのメタファーとしても用いられる。

7 ただし神罰について、ローマ教皇ベネディクト14世などが吸血鬼信仰を悪徳司祭のデマゴギーに帰した（種村，1983）こと、つまり下級司祭が土俗的吸血鬼伝説を利用し、民衆に恐怖を与え、その代わりに信仰と金を得るといった関係があったことは見逃せない。

8 この背景には宗教上の問題がある。18世紀のフランス啓蒙主義者ヴォルテール（1773）は、ギリシア正教会とローマ教会派の解釈の対立から説き起こしている。すなわちギリシア正教会からすれば、ギリシアの土に埋葬されたローマ教会派の信徒の死体は腐敗しない。なぜなら彼らは正教会を破門された人間だからである。ローマ教会派の見方は正反対で、腐敗しない死体こそ聖者の徴なのである。この東と西の解釈の違いには宗教的問題のほか政治的問題も絡んでくる。

9 世間一般に知られる十字架はあまり伝承には登場しない。これは注7に示したことと共に、キリスト教と吸血鬼との関係を考える際に重要な要素であると考えられる。

10 火葬が発達している地域には吸血鬼伝説は育たなかった（バーバー，1991；栗原，1991；種村，1983）からである。

11 ヘカテーはティターン神族の女神であり、アステリアーとベルセースの子である。三方向に三つの顔を向ける三重の像としてあらわされ、冥界の女主として夜になると咆哮する犬に伴われながら、死者の霊とともにさまよい歩いた（ケレーニイ，1974）。

12 またはエンブーサとも。血を吸い、人を食うものとして、ヘカテー・ラミア・エンブーサは時に同一視される。

13 オイディプス神話と比較したうえで、ドラキュラを恐るべき父とする向きもある（種村，1983）。

14 日本でも人を食う鬼子母神や、尻から血を吸う河童、生き血を吸う磯女・磯姫などが存在するが、これらは全て西欧の吸血鬼とは異なり、元々妖怪や神に近い非人間的な存在である。ただし小松（1995）の紹介する「葬式の晩の蓑笠をつけた来訪者」は吸血こそしないものの伝承の吸血鬼の特徴にかなり近いと思われる。

（心理臨床学講座 博士後期課程2回生）

（受稿2006年9月8日、受理2006年12月7日）

Vampires and the Transformation of Fear : A Study about the Relationship with the Other World in Psychotherapy

INOUE Yoshitaka

Psychological problems generate fear and anxiety. In psychotherapy, it is necessary to consider the other world ("IKAI" in a term of folk studies). This paper focuses on the vampire image and its change from a viewpoint of clinical psychology. According to Slavic folklore, vampires were characteristically dead persons who had come back to life to harm people. They would appear at night to drink the blood of close relatives. The victims themselves then had the possibility of becoming vampires. For these reasons, the people feared vampires. So, vampires are destroyed substantially by the artificial work as burning and/or impaling with a stake. On the basis of historical background, along with the fundamental discovery about human existence from the 19th century, vampires lost their substantiality and were transformed. Until now, they have held mental agony. It is a symbol of internalization of "IKAI". We need to tackle a vampire psychologically. Therefore to consider the meaning of vampire image and the relationship with the other world in our time, one dream is indicated and discussed. We must discover the meaning of the fear as a moment of meeting the sacred, which needs the worship. For the transformation of fear, continuation and artificiality is suggested. So, the vampire image helps to meet and transform fear.